

研究課題：異文化圏で活躍する日本人指導者のコーチング・スタイルの解明

研究代表者：高井秀明

本研究では、サッカー先進国であるドイツのブンデスリーガの下部組織で指導しているエキスパートの日本人指導者が欧米文化の相互独立的自己観をもつ選手とふれ合う中で、どのような指導を意識的に行ない、コーチング・スタイルを構築してきたのかについて明らかにすることを目的とした。

まずはGTA（Grounded Theory Approach）を用いてコーチング・スタイルの関連要因を示し、それらの関係性について質的に分析を行なった。テキストデータの文脈を考慮して分析した結果、1)「自己受容」、2)「他者受容」、3)「教育的配慮」、4)「冷静な対応」、5)「言語コミュニケーションの選定」、6)「非言語コミュニケーションの多用」、7)「効果的な指導方法の追求」という7つのカテゴリーが抽出された。

カテゴリー間の因果関係と相互連関をみると、日本人指導者は文化や価値観等を含む自己と他者を受容することからはじまり、サッカーの技術や体力のレベル向上のために選手を指導するだけでなく、教育的に配慮をしたうえでサッカーの指導に携わっていることが示された。また、日本人指導者はドイツ人指導者と比較して沈着冷静にサッカーを分析し、指導できることを特徴としている。それを最大限に活かすためにも、日本人指導者は選手や他の指導者と効果的にコミュニケーションを交わすべきであろう。その場合、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの適宜使い分けが重要となる。言語コミュニケーションでは必要な情報のみを厳選し、的確に伝達することをこころがけ、非言語コミュニケーションを多用し、言語コミュニケーションによる伝達事項を補うことがのぞまれる。これにより、選手にとってさらに効果的な指導ができよう。

以上のことから、日本人指導者が世界レベルで活躍するには、言語コミュニケーションに必要な言語習得だけでなく、その他に非言語コミュニケーションの方法についても学習するべきであろう。